

川越街道今昔物語

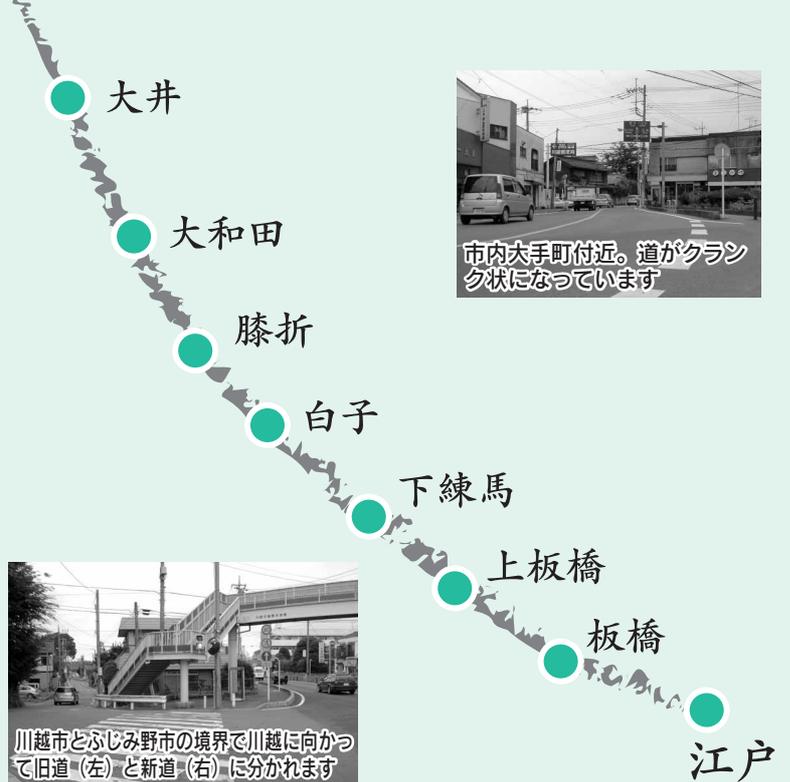


市役所の前に立つ川越城大手門跡の碑。かつてここが川越街道の終点でした。また、川越藩主は江戸に向けてここから旅立ちました。

● 川越



市内大手町付近。道がクラック状になっています



川越市とふじみ野市の境界で川越に向かって旧道(左)と新道(右)に分かれます

八月十日は「道の日」、八月一日から三十一日までは「道路ふれあい月間」です。道路に親しみ、関心を持ち、道路の役割を再認識するために定められました。

この企画記事では、ラジオの交通情報などでよくその名が聞かれ、県内はもとより、関東地方でもよく知られる川越の代表的な道として、川越街道を取り上げました。

この記事の中では、川越街道と呼んでいます。この名前前で呼ばれるようになるのは、明治以降のことです。江戸時代は、「川越往還」「川越道中」などと呼ばれていました。

問い合わせ：広聴広報課広報担当・TEL内線2124

街道の成り立ち

現在は、国道254号の一部となつている川越街道。その起源をたどると、室町時代にさかのぼります。

長祿元年（一四五七）、上杉持朝は太田道真・道灌の親子に、江戸城と川越城を築くよう命じました。その時、持朝と敵対する古河公方に対する防衛策として、川越から江戸を結ぶ古道をつなぎあわせました。これが、川越街道の起源といわれています。

川越街道が本格的に整備されたのは、江戸時代に入ってからです。

室町時代に基礎が作られた道を、三代将軍の徳川家光が、創建された仙波東照宮を訪れる際に整備させたと伝えられています。



中山道との分岐点である板橋宿。かつては右に行くと中山道、左に行くと川越街道でした。現在の道をたどると、川越街道はここから、国道17号を少し通り、東武東上線大山駅方面に向かい、国道254号に合流します

東海道・中山道などの五街道が整備されると、川越街道は中山道の脇街道としての存在になりました。

川越街道をたどる

現在、国道254号は、東京都文京区から埼玉県・群馬県を通り、長野県松本市に至る道路です。そのうち、川越街道にあたるのは、豊島区の池袋六ツ又交差点からほぼ東武東上線に沿って、板橋区・練馬区を通って埼玉県内に入り、和光市・朝霞市・新座市・三芳町・富士見市・ふじみ野市を通過し川越に入ります。文京区から池袋までは「春日通り」と呼ばれます。

現在、東京側の起点は豊島区ですが、江戸時代の川越街道の起点にあ



板橋宿から、しばらく首都高速道路の下を歩きます。昔の旅人が見たら、きっと驚くことでしょう

たるのは、中山道の板橋宿（板橋区）でした。江戸から川越に向かうには、ここから川越街道に入りました（下図参照）。

川越側の起点は、川越城の大手門（現在の市役所本庁舎付近）といわれています。

街道には、宿場が置かれました。江戸から川越に向かって、上板橋（板橋区）・下練馬（練馬区）・白子（和光市）・膝折（朝霞市）・大和田（新座市）・大井（ふじみ野市）の六つの宿場です。この宿場には、宿屋や休憩所などが置かれました。

川越藩主の通り道

江戸時代、この街道は、将軍や幕府要人のたか狩り、仙波東照宮訪問などで使われました。その中でもよく利用されたのは川越藩主の参勤交代です。川越街道を通るのは川越藩主のみで、他の大名が通ることはありませんでした。

参勤交代は、徳川家光が寛永十二年（一六三五）に出した「武家諸法度」により制度化され、一年おきに諸大名が江戸と自分の領地を行き来

するものです。

参勤交代で江戸に向かうときは、午前零時に川越城を出発し、午前二時から三時の間に大井宿に到着。ここで小休止をして、江戸に着くのはその日の昼ごろでした。

江戸から川越に戻る際は、出発は川越を出るときと同じ午前零時、大井宿にはその日の昼ごろに到着し、小休止。川越に着いたのは夕方でした。

行列が通過する街道沿いの各地域では、事前に藩から注意が出され、各地域の名主など代表者が先払い役を行っていました。各村の名主は、行列が来ると、自分の地域内を先導

